

福田徳三の商人論

池 間 誠

1 はじめに

不正経理事件，商品欠陥隠蔽，原産地不正表示，補助金搾取等々，不祥事の手口はさまざまで，その軽重もさまざまであるが，企業・経営者の行動・責任のあり方，とくに倫理があれこれ問題とされている．しかし，彼らは自己の判断で，自己の責任でそのように行動したのだから，倫理がどうのこうのということで責め立てる必要はいささかもない，そのような行動者は市場競争の中で駆逐されていく，という意見もある．

ましてや，なぜいまさら倫理教育か．そもそも倫理といっても誰にとっての倫理なのか，またどのような状況での倫理なのか，どのような価値観なのか，ある人の価値観は他の人の価値観とは同じでなく，またある状況での価値観は他の状況での価値観とは異なる．それらは相対的である．そのように議論は紛糾し，不祥事の発生は止も得ない，放任すればよいとされる．

本稿の課題は，「利益の追求，金儲け」の倫理的な側面を福田徳三（明治 7（1874）年—昭和 5（1930）年）の商人に関する議論を紹介しながら，検討することにある．本稿の依拠するものは，福田徳三著『経済学全集第 4 集 経済学研究』（同文館，大正 14（1925）年）（15 頁＋1827 頁＋索引 37 頁）に第六篇として収録されている「現代の商業及商人」（765—1021 頁）である．

ここで取り上げる「現代の商業及商人」は，福田自身が言っているように，「通俗講話」である．経済学の「民衆化」に果たした福田の役割は大きく，「通俗講話」による商人論もその流れにあり，彼の本音が聞こえてくるという長所があ

る。

ともあれ、福田の議論の大筋は、こうである。商人が利益を獲得するのは新結合という創造的活動の結果であり、それは社会の富を増加させる。しかし社会の富の増加は必ずしも社会の幸福を増加させるとは限らない。商人または産業人は、自分の利益増進というよりもは、社会全体に対してどれだけ貢献したかで評価されるべきであり、またそのような覚悟で行動すべきである。経済のグローバル化（国際貿易の拡張）も、そのような互惠的利益を基礎におかねばならない。

以下、このことを順次詳しく紹介し検討しよう。本稿の性格上、引用が多くなるが、これも福田の論調の雰囲気を知らせるために有効であろうと思うので、ご容赦願いたい。

1 「現代の商業及商人」の構成と趣意

さて「現代の商業及商人」は、以下の12章から構成されている。

- 第一章 士魂商才
- 第二章 戦争と商業
- 第三章 士魂と商魂
- 第四章 商略と軍略
- 第五章 財権と商権
- 第六章 旧時代の商人と現代の商人の差点
- 第七章 現代に於ける商人の意義並に任務
- 第八章 新商人の教育
- 第九章 資本と其の運用
- 第十章 商店と市場
- 第十一章 景気と不景気
- 第十二章 戦後の世界と商人の任務

第一章から第十一章までは、最初、大正5（1916）年3月から同6（1917）年3月にわたる1カ年間毎号『商店雑誌』へ連載したものである。さらに訂正を加えて、大正7（1918）年3月刊行の福田徳三著『経済学考證』へ第九篇として収

録された。そしてまた、大正9(1920)年に大鐙閣から単行本として出版するに際し、結論の意味で第十二章『戦後の世界と商人の任務』が新たに追加された。本第四集に示された「刊行一覧」によると、『増補改訂 現代の商業及商人』が同文館から本集出版と同じ大正14(1925)年に出版されている。

福田は、第十二章を付け加えた理由を、大鐙閣版の「序文」(本集、14-5頁)で以下のように述べている。

「元のままでは実は尻切れ蜻蛉であります。論を武士道から起こして商人道に進み、これについて種々な問題を提供しただけでは、従来の商業立身談、実業成功論などとあまり違わないと誤解される虞があります。私の期するところはむしろその反対でありまして、商人道起こって武士道に代わったごとく、いまや新しい世界においては、さらにこの商人道に交代すべき新しい理想が騒々として進んできていることを明らかにするのが、本書の趣意であります。第十二章を付け加えたによって、この趣意が初めて十分に徹底し得るようになったかと存じます。」
[表記は現代表記に変更した。以下同じ]

この文章が示しているように「現代の商業及商人」の趣意は、「武士道に代わって商人道が起こり、その商人道に代わって？」というところにある。疑問符の箇所が重要である。そこに焦点を当てて紹介し検討するのが本稿の課題でもある。

ところで、第十一章までが連載された『商店雑誌』(発行所：商店雑誌社)は、大正2(1913)年に創刊されている。一橋大学附属図書館が所蔵しているのは、第5巻、第6巻の第2-3号、第5-7号、そして第9号である。第5巻第1号の「年頭に当たりて」において以下のように述べられている。

「年頭において本誌の主義を繰り返して置くのもよからうと思います。

本誌は商人諸君が共同商店を経営して行かるる上に於いて唯一の相談相手たり顧問たるべき覚悟で編纂して居るのであります。

商人諸君は忙しい。だからなるべく『スグ間に合う』ということのを頭に置いて、その記事に於いても、その口絵挿絵等に於いても、常に筆を執って居るのであります。矢鱈にむづかしい文字を列べて空論計りを書くような事はいたし

ません。

特に本誌の特色とする処は、福田〔徳三〕博士が毎号『諸君に適切に響く論題』を捉えて執筆される事と、今日実務界に名ある諸先輩がそれぞれその独得の研究を発表される事とであります。〔以下略〕

なお、第5巻第2号の目次に大きな活字で「渋澤〔栄一〕男爵は本号より毎号修養的の文字を寄せらる事を快諾せられり」とあり、「商人と競争」という文章が寄せられている。また、社主として圓城寺 良、主筆として清水正巳の名がある。

この雑誌自体にも関心がそそられるが、ここではこれ以上述べる知識はない。ただ、どのような雑誌に福田の文章が掲載され、それゆえにどのような読者を対象としたかが伝われば十分である。福田自身も、「現代の商業及商人」は、「初めから通俗を趣意した一つの連続講話」（14頁）であると述べている。ただし第十二章は、文体からしても、書き下ろしではないかと思われる。

掲載された雑誌の性格、そして「通俗連続講話」という趣意に相応して、参考文献や脚注などは一切記されていない。どのような文献に福田が依拠したかを詮索することは、それなりに興味を引くことではある。しかし、ここではそのようなものとして、そしてそのようなレベルでの福田の商人論に関心を集中することにしよう。

3 「商人は社会進歩の先駆者」

「文明の国民として文明の社会に処して、日常平和の業、国を富まし世を富ます上における根本的精神」（第一章、791頁）、これを福田は「新商人道」、「産業道」、あるいは「経済道」と名付ける。さらには「商魂」とも呼んでいる。ここで新商人の「新」というのは、営利主義の経済生活、特にいわゆる資本主義経済組織のもとにおける商人という意味である。われわれの考察は、この営利主義の状態から始めるので、「新」という修飾語は付けなくてもよろしいであろう。

さて、昔から「利欲を蔑み、富を以て汚れの源」という考え方がある。この考え方を「全然一擲せねばならない」と福田は言う。そうすることによって、商人

の行動、商人自体を社会的に正当に評価する途が開けるからである。

「商人であって、なおかつ立派な人間の道を取って往かせるようにすること、すなわち今日文明の根本的の要求である。この要求に応ずるところのものが、すなわち商魂と名づくべきものである。さてその商魂なるものは、むろん利欲を否定するものであってはならない。またこれを軽んずるものであってはならない。富を得ることをあくまで正しく取り扱い、利欲をを求むところの念を美化して往く道徳でなければならぬ、これがはなはだ困難なことである。」(第3章, 807-8頁)

因みに、ここで提起された問題は、アルフレッド・マーシャルが「経済騎士道の社会的可能性」(*The Economic Journal*, Vol.17, No.65 (March, 1907))において提起した問題と同じである。これと対比しながら両者の異同を考察するのも価値があろう。しかし、本稿の性格上、その点については最後に一言言及するに止めるであろう。

ともあれ、そこで彼は次の問を發する。「そもそも今日の社会において富を造り出す、金を儲けるというのは、どういうことを意味しているか」と、「今日においては、ひとり商人のみでない、工業者でも農業者でも、いやしくも社会の表に立って生産営利の業に従事するのは、ひっきょう多くこの利益を得ることによって存在してゆけるので、その利益が積んですなわち富となるのである。」(第三章, 810頁)

問題は、この利益なるものが、道徳上いかなる意味を有するか、ということである。これに答えるために、福田は「利益はなぜ生ずるのか、その源泉はどこにあるか」を追求する。「そもそも利益がなぜそこに出て来るかといえば、何か新しいことを始めるからである」と福田は言う。

この「新しいこと」として彼は、以下のことを指摘する(第三章, 812頁)。

- ① 従来結び付かなかったものを結び付ける、
- ② 従来存在していなかったものを産出する、
- ③ 従来売り出されていなかったものを売り出す、
- ④ 従来売れなかったものを売れるようにする、

このようにして、「とにかくそこに一つ新しい結合ができる。この新しい結合が従来無かった所の新しい価値を生ずるのである。」(第三章, 812頁)

さらに彼は、「この新しい価値が生ずるというのは、新しいものの生ずるということと同時に起こることもあるし、そうでないこともある。」(第三章, 813頁) すなわち、次のようなことだけでも新しい価値が生ずるのである。

- ① 従来のままでただ形が変わっただけ、
- ② いな形も変わらぬが置き場所が違う、
- ③ いな置き場所も変わぬがただ使い方が違ってくる、
- ④ いな使い方にも違いはないが使う人だけが違う。

この見解は現在でも斬新である。と同時に、ジョセフ・A・シュムペーターの『経済発展の理論』(初版1912年)における「新結合の遂行」という概念を想起させる。革新的企業家である。しかし、ここではこれ以上言及しないことにしよう。

このような新結合の遂行によって創造された価値は、「あるいは社会全般にあるいはある一部の人に、とにかくそれだけ人の幸福を増すので、それだけ社会上の利用〔効用〕を産出してくる。その産出した利用〔効用〕の一部分は、そもそもその事を企てた人の懐へ金銭上の利益となって入る。」(第三章, 813頁)

ところで、商人は、その任務上から言っても、そのような新結合を遂行する立場にあると福田は言う。すなわち、商人は、需要が未だ起こらない所に先ず自らこれを認めて、その需要が起こるようにいろいろ工夫を凝らし、生産者が未だ考え及ばない生産方法を自ら先に考案するというふうに、「一步ずつ社会の進歩より先に進んで行く者である。」(第七章, 857頁) このことのために、社会に起こる富の増加が、先ず「これら商人の手に帰着する所以であって、決して不健全なる状態ではない。」(第七章, 857頁) のである。

かくして、福田は、「商人は社会進歩の先駆者である」として、次のようにおおらかに宣言する。

「商人にして以上言った意味の商人であり、以上挙げたところの任務を尽くしておって、社会の魁たる限り、商人が社会に生ずる富を早く先に占めることは、その道の宜しきを得たものである。これがいわば商業道德の骨髓とも言うべきも

のである。あらゆる商業道德の法則はこの点から導き出されなければならない、商人は社会進歩のパイオニヤーであるから、利益を受ける点においてもパイオニヤーであるのである。……[ただし]己は唯社会の先達たるがゆえに、最も早く利益の分配に与るのであるが、その与るところのものは、これを社会全体に波及すべき義務を当然に有しているものである。」(第七章, 857-8頁)

「さてこう考えてみると、商人が利益を得るのは、その利益が貴いのではなく、社会に利益を与えたことが貴いのである。」「しからばこの利益を道德上宜しくないと認めると、この利益を喚起する新しい企てを全然止すことになる。すべての人をして罪に陥ることのないように、少しでも道德に触れてはならぬといって、戦々恐々として手を拱いて退嬰的生活を送らせることになってしまう。その結果は萎縮して振るわない、国の富はいつまで経っても増進しないのである。」(第三章, 814頁)

以上において紹介したように、「営利主義の経済生活、資本主義経済組織」においては、福田徳三は、商人の利益が、その商人の革新的な創造活動に対する報酬であり、しかもその活動が社会全体に与える価値増加の一部分に過ぎないと主張する。したがって、利欲にもとづく商人の行動(金を儲けること)は、社会の富の増進という視点からすれば、道德的にも積極的に評価されねばならないと彼は結論するのである。われわれのコメントは、第5節において行なうであろう。

4 「商人の最高の使命は商人なき社会の実現」

ところが、大正9年(1920年)に追加された第十二章「戦後の世界と商人の任務」において、「この度の大戦争[第一次世界大戦, 1914-9年]から始まって今日に至るまで、まことに短い年月の間であるけれども世界の状態は非常に变化した」ことを考慮して、福田は、新しい商人論を展開している。以下、この新商人論を紹介しよう。

「然らばその世界における大変動とは何であるかといえば、労働問題の勃興が具体的例を示しているが如く、約めていえば営利経済一点張りの社会組織は、到底人類の幸福と一致しないということが、世界中において徹底的に認められた

ことすなわちこれである。……資本万能主義が到底維持せられなくなったことがこれである。」(第十二章, 968頁)「資本万能主義」が終焉したのである。

「要するに、人間を富の欲から解放するというのが、その[大変動の]最も主要なる点である。これは決して富そのものの存在を否定するものでもなければ、また富を作るということが否認するものでもない、この一点は決して誤解してはならぬ。富の所有ならびに運用についての今までのやり方が、一部階級のものには有利であったことは十分にこれを認めるけれども、国、社会の統ての人々に一樣なる幸福をもたらしたたものではないということが徹底的にみつめられたことすなわちこれである。」(第十二章, 968-9頁)

第一世界大戦によって、人びとは、他の国を奪ったり、植民地を獲得したり、他国の利権を奪い取ったりすることの愚かさを分かった。しかし、これに変わって、「今度は一つの社会において、今まで圧迫せられて居った下層階級が、従来自分等の持っておらなかった権力を振るおうという考えが著しく強くなった。」(第十二章, 979頁)

しかし福田は「これは確かにこの世界変動に起こった改悪である」と断じ、「現在の変わった天下はこの天下を誰の天下にもしないというのである」(第十二章, 979頁)と主張する。

「今までの天下は武士の天下である、資本家の天下である、金持ちの天下である。その『誰々の』という形容詞を取ってしまって、天下をすべて天下の天下にしようというのが世界の大変動に依って得たる考えである。今日はまだその一段階であるが、これが人類の進化発展の理想として正しいものであることは、先覚者の間には十分に認められてきた…」(第十二章, 980頁)

ところで、今までは「人は富を持たなければ社会に活躍することが出来ない」ということが金科玉条のごとく認められておった、と福田は言う。しかし、「今日においての考えでみると、これは決して万全なことではない。富まないよりは富む方が好いよとは言い得ることであろうけれども、そもそも富むことが好いというのは何であるか、それはその人の幸福が増進するからである。国が富むということは国民がこれに従ってより善い生活をする事が出来るからである。」

(第十二章, 996頁)

さらに、「今までは富むということは、すべてそれだけ幸福を増進することを意味しておった。故に富むということの人々皆が歓迎しておった。しかし退いて考えてみると、富むと言うことでなくとも幸福を増進するならば、必ずしも富むということをする必要はない。いわんや富むために弊害が起こるというなれば、富むことを求めなくともよい。」(第十二章, 986頁)

人々は、社会は、富から解放されて、幸福(福祉)の増進に重点を移す方向にあるのである。かくして、商人の任務もその方向へ、すなわち富の増進から幸福の増進へと転換する必要がある。このことを、福田は次のように述べている。

「今日のこの変動した世界においては、商人は出来るだけ人間の幸福増進に助けあるべき欲望の満足を、出来るだけ少ない費用を以てすることに務むべき任務を持って居る。自由競争の結果、最も少ない生産費を以てやっている商人が成功を収めているのと同じく、いくら広告術が上手でも、販売政策がうまくても、最良の商品を最廉の生産費を以て提供するのではなければ、何にもならない。商人の仕事はこの点に集中して来なければならぬのである。」(第十二章, 1016頁)

そのような革新的商人は、結局、商業なき社会の実現を目指すことになる。福田は言う。「すなわち商人は生産者に向かっては出来るだけ生産費を少にすることを示し、消費者に対しては優秀なるものを出来るだけ低廉に供給する指導者となり、刺激者となり、促進者となり、生産者と消費者との間に立って働いて、終には左様な仲介者が無用に帰する時代を実現するために努力することが商人の目的たるべきである。」(第十二章, 1018頁)

「今後の商人は、商人が存在している社会というものはまだ完全なる社会ではない、いままでのような商人が必要なる社会はまだその進歩発達が十分なる社会ではない、終には商人という階級がなくなってしまい、商業というような特殊の分業がなくなってしまう社会が来るに向かって奮闘努力しなければならぬ。」(第十二章, 1014頁)

ここでもシュムペーターの創造的破壊、自ら成功したが故に自らの役割を放棄するというイメージが浮かんでくる。ともあれ、コメントは第6節で行なう。

5 商人の精神：商魂

商人の獲得する利益は、新しい価値の創造から生ずる。したがって、それは社会全体の富を増加させる。そうであるならば、「一人の利益は他人の損失」という視点から商人の利益獲得、商人の利欲にもとづく行動を批判することはできない。新価値の創造という視点からするならば、逆に、商人の利欲は評価されねばならないのである。

このことを踏まえて、福田は、「今日の産業商業の上における利益は、常に一挙千得、一挙万得を意味している。なぜ一人の為すところが一挙万得になるかという、その利益は他人の常に持っているものを奪うのでもなければ、また他人の取るべきものを取るのでもない」（第三章、812頁）からである。「一人が利益を得れば他人も利益に与る」のである。

ところで、「商人が一事業を起こし、一の商品を売り出すにあたって、社会に与えるところの利益いかにということを常に打算してから、それに従事するものでないことはいうまでもない。彼は常にこれによって自分が得べき金銭上の利益を標準として事を始めるのである。しかしそれがつまり社会に公益を与える所以となる。」（第三章、815頁）

これがアダム・スミスの「見えざる手」の援用であることは明らかである。しかし、それはそれとして、ここから福田はさらに言うのである。

「商魂すなわち商人の精神は、ここから発揮せられなければならぬ、なるほど一々の行為にあたっては、社会の幸福利益を念としてはいないが、商人たるからには、己の得たる金銭上の利益が常にこれに伴う、もしくはこれに数倍数十倍する利益を社会に産出しつつあるものである、また産出するようであらねばならぬという考えがなければならぬものである。これがすなわち商人をして非常特別の場合にあたって、泰然として一糸乱れず、また日常茶飯のことに処しても、秩序整然として節度を守ってゆくことを得せしめる根本の力であって、我が輩がここに名づけて商魂というものである。」（第三章、815頁）

「自分の行為が社会に貢献している」ことを常に意識し、そのように行動しろ、

と言うのであろうか。これは厄介なことである。「自分の仕事に集中せよ。そうすれば自ずから社会に貢献する」というのが、アダム・スミスの主張であったのではないか。ここまで話が進んでくると、どうしてもアダム・スミスを引用せざるを得ない。

「社会の利益を増進しようと思いついでいる場合よりも、自分自身の利益を追求するほうが、はるかに有効に社会の利益を増進することがしばしばある。社会のためにやるのだと称して商売をしている徒輩が、社会の福祉を真に増進したというような話はいまだかつて聞いたことがない。もっとも、こうしたもったいぶった態度は、商人のあいだでは通例あまり見られないから、かれらを説得して、それをやめさせるのは、べつに骨の折れることではない。」(アダム・スミス(大河内一男監訳)『国富論』(中公文庫)II, 120頁)

ここで福田がいう「商魂」は、スミスのいう「もったいぶった態度」に対応するという奇妙な事態、こまった事態になっているのである。しかし、福田はその行動が社会の広い範囲に影響を及ぼしうほどの商人を想定していると思われる。そうであるならば、そのような商人は、公共の利益を考えねばならない、つまり広い対象に関心を払う必要があるのである。換言すれば、自分の行動が社会に及ぼす結果を考慮しておかねばならないのである。

また、たとえ「各個人は自分自身の利益を自由に追求してよい」というアダム・スミスの原則が認めたとしても、その前提にある「正義の通則に従う限り」、あるいは「公共の秩序を乱さない限り」という限定を忘れてはならないであろう。実際、これと関連させれば、彼の以下の主張は理解できよう。

「吾輩がいわゆる商人の覚悟として主張せんと欲するところは、良心に恥じる成功者となることを断じて避け、むしろ世間から失敗者といわれ破産者と卑すまれても、俯仰天地に恥じず、いな天地に俯仰して誇り人にも誇り得る商人たるべしということ、これである。」(第十二章, 1019頁)

この文章で思い出すのは、日本の商業教育の父であり福田の恩師でもある矢野次郎の言葉である。

「……社会の相当な地位に立ち、相当な生活をして、それで俯仰天地に愧じない

人間でなけりやあ、真の独立生活ということはできぬ。この俯仰天地に愧じないということは、今の実業界にはすかり忘れさられているじゃないか。これが人間の品位で責任の根源だ。」(「学説政務」第710号明治38年1月5日、『一橋大学学制史資料』第3巻(明治35-42年))

商人は革新的であるだけでなく、何よりも誠実でなければならない、端的に言えば、これが福田の議論から浮かぶ商人像のようである。「商人という中、重いのは商という字ではなくして人という字である。」(第十二章, 1010頁。あるいは第三章, 809頁) 彼は駆け引きなどによる利益獲得を拒否する。そのようなものは一時的であって継続性のあるものではない、と言うのである。「商才」などは要らない、と断定している。現在の一部のビジネス・スクールで、「暗黙の契約を破ることで利益を得よ」と学生に教えていることは、福田に言わしむれば、とんでもない「危険思想」であろう。なお、この点については、第7節でも触れるであろう。

6 革新的企業家

「そもそも〔富から解放された〕新しい時代に処する商人は、全然根底から変わった覚悟と変わった態度とを持って掛からなければならぬのである。その態度その覚悟とは何であるかという、今までの意味における商人というのものは、向後の社会にはむしろ無くもがなな階級であって、これに代わるべきものはさらに、ずっと進んだ形の企業家たるべきことを深く自覚することがこれである。軍人は軍人などというものが無い社会を実現すべきと一般である。」(第十二章, 1009-10頁)

「しかしながら今日ではそういう場合に立ち至っておらぬから、自分らは活動するけれども、早く自分たちの旧来の職業が葬られるように心掛けねばならぬのである。」(第十二章, 1012頁)

既に第4節で紹介したように、商人は、生産者と消費者と仲立ちとして、生産者には生産費を少なくすりように働きかけ、消費者には良質なものを低廉に供給するように働きかける。このような「特殊の分業」が存在する社会は未だ不完全

な社会である、と福田は言う。しかしこれは言葉に酔っている嫌いがなくてもない。

福田は、社会政策学会での講演において河上肇が「医者理想というものとは医者なき人生を現出するにあり、人類が病に罹ることがなくなってしまうということが医者理想である」と言ったことに感心したと記している(第十二章, 1013-4頁)。しかし病気がなくなれば医者が無くてよいというのではない。医者がいるからこそ病気がなくなる状態が保たれるのである。

生産者と消費者の仲立ちという視点から商人をみると、結婚の仲人に例えたほうがよいかもしれない。若い男女が直接に交際できずにいるが、結婚適齢期に至ると、仲人を立て両方を結び付ける。しかし、男女の交際が自由になれば、互いの結婚相手は自分で選ぶようになり、本来の仲人は要らなくなるのである。

これから類推すれば、生産者と消費者が疎隔しておれば商人は必要であるが、両者が直接取り引きするにいたるならば仲立ち役の商人は必要でなくなるであろう。たしかにそのような面がないとはいえない。両者を直接交渉させるに至ったのが商人である場合も多い。それゆえに、商人は、その業務を忠実に遂行した結果、その仕事を失うことになるわけである。これが福田の立場である。

生産者と消費者の出会う市場が整備されるにつれ、別の言い方をすると、輸送情報通信手段の改善発達につれて、市場規模は拡大し競争が活発になるであろう。このような状況の変化を巧みに利用し、すなわちそのように変化する状況のなかに利潤(利益)獲得を機会を見出すのが革新的企業家である。それには「売るために買う」という商人も依然として含まれるであろう。

「今後の商人は、商業というような特殊の分業がなくなってしまう社会が来るに向かって奮闘努力しなければならぬ」という福田の主張は、「自らの仕事に奮励努力しろ」という商人に対する叱咤激励にほかならない。

7 「新商人の教育」

では以上のような意義と任務を帯びた商人の教育はいかにあるべきか。これを論じたのが第八章「新商人の教育」である。この章は彼のいわゆる「富から開放

された新時代」以前に書かれているが、しかし彼の基本的主張であるいわゆるリベラル・アーツ、一般教養教育の重視ということでは変わりはない。(なお本節での引用頁はすべて第八章である。)

福田は「商業教育とは先ず以て人を造る所為である」と断定する。では人を造るにはいかなる教育が必要であるかと言えば、それは「最も良い意味における常識涵養」すなわち「開発せられた常識の涵養」でなければならない(863頁)。「それには少なくとも科学を以て土台としなければならない。科学の中にもいろいろあるけれども、主として数学とか物理および化学とか、生物とかいうような自然科学と、それから人文の教育、この二つを兼ね併せたものでなければならない。」(863頁)と言う。

「人を造る教育、開発せられたる意味における常識の涵養は、速成実用ではない。物を考える力、推理の力、了解の力、見聞したものを把持する力等を具備した人でなければならない。数学の素養はこれらを得させるのに必要である。その他の科学も、この意味において必要なだけは、是非授けなければならない。」(864頁)

人文教育においては、日本人として日本の教育ある人、国民として立って行くには、「国語漢文の一通りの知識は是非持っていなければならない」(865頁)し、「地理、歴史など」も是非知っていなければならない(866頁)。

ところが、福田によると、「今日のいわゆる実業教育、商業教育」は、「直ちに間に合い、役に立つ人物」、すなわち「商業技手の教育」に過ぎない、と言う。ビジネス・マンのビジネスを強調し、マンが無視されている、というのが福田の批判である。「今日の実際の科目の中で、頭脳の養成に功があって、実際右から左へ役立つものは、簿記の一科目だろうと思う。」「簿記そのものの性質はただに実用芸術にとどまらずして、物を考える力、推理の力などを養成するに著しき効能を有することは疑いない。」(864頁)

かくして、このような視点から、福田は次のように断ずる。「我が国現在の商業教育というものは、新時代の新商人を養成する方法としてははなはだ不具、不備のものである。先ず人を造るという大眼目を十分に自覚した新教育が起ころね

ばならぬと思うのである。」(866頁)

福田の「先ず人を造る」という視点は、これを無視するわけにはいかない。しかしながら、専門科目を軽視するわけにはいかないであろう。例えば経済学の基本的な特色である相互依存関係の認識は、福田の言うところの「商人の任務・自覚」を習得させるに重要である。問題は「技術・技法」を教えながら、その用いられ方が社会全体の利益とどういう関係にあるかを考慮することでなければならないであろう。

8 経済のグローバル化：戦争と商業

既に第5節で紹介したように、福田は、「今日の産業商業の上における利益は、常に一挙千得、一挙万得を意味する」ことを強調する。同じ視点は、「国と国との商売」すなわち国際貿易を論じた「第二章 戦争と商業」においても貫かれている。彼は言う、「今日の国際関係の頗る発達した世の中においては、少しでも他国を害して自国が永久的に利することのあり得ようはないのである。なるほど一時はそういうことが出来るかもしれぬけれども、それは結局損になる。大局から打算していえば、一挙兩得の商売関係でなければ決して永久的に往くものではない。」(第二章、793頁)と。

しかしながら、国際貿易の拡大、経済のグローバル化は、そのような相互利益という商業の論理よりも、「己が勝たんと欲すれば必ず敵を倒さなければならぬ、敵に害を与えなければ己が勝つということは期し得られない」(第二章、797頁)という戦争の論理によって促進されてきた、と福田は論ずる。そこで、戦争と商業の絡み合いを通じた福田徳三の経済のグローバル化論を紹介しよう。

福田は国際貿易の発展を、中世のイタリアの都市が起こした商業から始める。それは地中海を渡って小アジア地方、それから遠くインドまで行ったところの貿易であった。「イタリアが東洋のアジア諸国と貿易を営むに至ったそもそもの端緒はどうして開けたかという、かの有名な十字軍であった、十字軍のためにヨーロッパの兵隊が汎山小アジアに行った、これがイタリアの商人が小アジアに往く手解きであったのである。それから後イタリアの商売は必ずしも干戈に訴え

なくとも順当にやって往けた。」(第二章, 787頁) いずれにしろ, 当時の世界商業の檣舞台は地中海であった。

その後, アメリカ大陸の発見, 東インド航路の発見によって, 世界商業の大勢は全く変わって, その檣舞台は大西洋となり, その規模も非常に大きなものとなり, そこでの立て役者はスペイン, ポルトガルであった。スペイン, ポルトガルの時代になると, 「万里の異域に出て非常な危険を冒して商売をし, また植民地を開くのであるから, 商人は皆同時に軍人でなければならなかった。彼らは常に剣を帯びて, いつ土人が襲撃してもこれを撃退する用意をしつつ商売をしておった。故にこの時代にあっては, 商売は平和の戦争であるという諺がまことによく真相をあらわしたものであった。」(第二章, 787頁)

「スペイン, ポルトガルに続いて起こってきたのはオランダであった。オランダはスペインの領地であったが, 反旗を翻して遂に独立国となった。そのオランダが母国スペインを凌駕し, 世界の商権を自国の手に収め植民地経営までも大規模に始めて, スペインの植民地を片っ端から奪い取り, 東洋に來ても現に種々なる画策を用いて, 遂にスペイン, ポルトガルをわが国から放逐してしまつて, わが国の海外貿易を自家の一手に独占することになった。このオランダ人が植民地を開拓するには武力, とくに強大なる海軍の力に訴えたので, いわゆる『貿易は国旗に従う』という諺が出来たくらいである。」(第二章, 787-8頁)

オランダに続いてフランス, また間もなくイギリスが起つてきて, オランダの手から商権を奪い取り, その植民地を奪い取った。イギリスの商権, 植民地の拡張も武力によるものであった。

「以上, 商売は戦争と同じどころでない, 戦争によって商売が拡張せられたので, 右の手に剣を執り, 左の手に算盤を持って, 汝算盤を取らずんば我が剣を執らんという態度を以て臨んだのである。」(第二章, 789頁) 戦争によって経済のグローバル化が推進されたのである。と言うよりは, 福田はこのことを, さらに, 裏返して次のように言っている。すなわち「実は商売の利益上必要な場合に戦争をしたので, 商売上の利益のない戦争を企てるということはほとんどなかった。」(第二章, 789-90頁) のである。

ところが、アメリカとの戦争、いわゆるアメリカ独立戦争によって、イギリスの従来の態度に大変化を来した、と福田は言う。「すなわち戦争を商売上の一つ的手段とすることも、また他国を征服するに商売上の利益のみを以てするというのも、もはや維持すべからざることを悟ったのである。」(第二章、790頁)

このことを悟ったのはひとりイギリスだけではない。「世界中においてこの時から戦争の意味も商売の意味も著しく変わって考えるようになった。すなわち戦争と商売とは、必ずしも提携するものではないということになったのである。」(第二章、790頁)

福田によれば、そのような悟りは遅きに失したと言う。それは「商売は他国を害して自国を利する」という狭い考え方に囚われていたからである。しかし「当時といえども実際の事実は決して必ずしもそうではなかったので、一国が利するところがあれば、他国もその利に均霑するのである。著しい例をあげれば、十字軍のためにイタリアの商売が大繁盛した。ひとりイタリアが繁栄したのみならず、ドイツ、オーストリア、スイスのある部分のごときも大変繁盛を極めた。しかし必ずしも他の国を害したわけではない。」(第二章、793頁) アメリカカの発見の場合もそうである。

「衝突するように見えたは一時もしくは一局部の現象で、大局から打算すれば、決して一国の利は他国の害ではなかったので、当時の人の物の見方、すなわち眼界がきわめて狭かったために、一局部一時代のことはばかり見ておったから、利害がつねに衝突するように見えたのである。」(第二章、793頁)

ともあれ、アメリカの独立戦争は1775年に始まり、パリ講和条約の調印によって独立を達成したのは1783年であった。そして、アダム・スミスの『国富論』が出版されたのは1776年であった。いわゆる「貿易差額説」にもとづく重商主義政策、福田の言う「戦争と商業の連携」あるいは「政治と商業の連携」はアダム・スミスによって徹底的に検討批判され、自由貿易の理論が展開されることになる。この時期を福田は「戦争と商業の分離」として規定しているのである。

ただし福田は、さらに、次のように述べる。「ところが時勢はそういうふうに変わってきたにかかわらず、人間の思想はこれに伴っていない。今日といえども、

どうもすれば商売の目的のために戦争をし、戦争は最も利益ある商売と考えるという習慣が脱しきらない。だから商売は平和の戦争などということが言われているのである。」(第二章, 790頁)

戦争は勝負であり、商業は互惠である、というのが福田の基本的な視点である。したがって、両者は相容れない。「商売は平和の戦争である」というのは、福田に言わせると、危険思想であり、徹底的に排除されるべき考え方である。しかし、現在でも、「貿易戦争」と言ったりする。そして、実際、依然として、経済上の利権を求めて戦争が行われていることを否定するわけにはゆかない。イラク戦争と石油利権など。

9 おわりに

人々が協力しているかぎり、彼らの目的は他人の目的と一致し、そこには他人の利益は自分の利益だという認識が生まれる。商業活動はそのような関係である。この協力的、分業的相互依存関係のなかで各自が自分の利潤を最大にするように行動するならば、結局、社会全体の生産物(富)も最大になるであろう。逆に言うと、各自は社会全体の富の増進を考慮することなく、自分の役割を忠実に果たせばよい、ということになる。

しかし、福田徳三は、以上で紹介したように、社会全体の富または幸福の増進に自分自身が貢献していることを認識する必要があると言う。福田は、そう認識することは「商人の使命」であり、「商人の任務」であるとも表現している。これはアダム・スミスとは異なった、功利主義の立場でもあろう。ジョン・スチュアート・ミルはその『功利主義論』(1863年)において、教育と世論を利用して、各個人に、自分の幸福と社会全体の幸福は切っても切れない関係にあることを思わせるようにすることは、人々が社会全体の幸福に反するような行為を押しとおして自分の幸福を得ようなどと考えなくなり、さらに、全体の幸福を増進しようというひたむきな衝動が各人を習慣的に動かすようになる、ということ述べている。このことを念頭におくと、福田の商人教育論も理解できるであろう。

福田は「金儲け」は「新価値創造」であると積極的に評価している。ここで背

景にあるのは、既に言及したように、シュムペーターの革新的な企業家である。これに対してケインズの皮肉な見解がある。ケインズはその『雇用・利子および貨幣の一般理論』(1936年)第24章において次のように述べている。金儲けと私有財産の機会が存在するために、残忍性とか、個人的な権力や権勢の無謀な追求とか、その他さまざまな形の自己顕示欲という危険な人間の性質が、比較的害の少ないマネーゲームにそのはけ口を求める、というのである。ケインズは言う。「人が暴君となるなら、仲間の市民に対して暴君となるよりは、自分の銀行残高に対して暴君となる方がよい。」(塩野谷祐一訳, 377頁)と。ケインズの見解は、相対的であり、今日のビジネス・スクールの立場に近いようである。

マーシャルは「経済騎士道の社会的可能性」において、産業の進歩がその人たちの事業に大きく依存する事業家というのは、富そのもののために富を求めるのではなく、むしろ事業成功の印としてそれを求める場合が多いと指摘している。福田の論調も軌を一にしている。しかし、マーシャルにあっては、そのような自由な企業家の活動に政府が介入することを厳しく戒めている。そのような創造的活動は自由に放任しろ、というのである。福田においては、少なくとも「現代の商業及商人」においては、そのような視点が希薄のように思える。

福田は商人の「任務」「使命」を強調する。彼は商人に倫理的義務を教える。確かにそのことは倫理的行動を保証するものではないが、しかし倫理的に行動するために大いに役立つであろう。福田の言う「俯仰天地に恥じず」という基本態度は、各自が心底にもつべき覚悟である。その態度に立ってはじめて自由な行動が許されるであろう。それは通俗的に大時代的に表現されてはいるが、そのような行為というのは、目的と手段が共に道德律の要求するところに一致しているものでなければならないからである。

(一橋大学大学院経済学研究科教授)